

# マリー・ホール・エッツの絵本における ガストン・バシュラル的考察

林 孝憲

A Study of Marie Hall Ets's Picture Books from the Point of View of  
Gaston Bachelard

Takanori HAYASHI

哲学者ガストン・バシュラルは、著書『夢の詩学』において夢を現象学的観点から論じている。特に第3章「幼少時代へ向かう夢」では、幼少期における自由で平和な夢の創造するイメージが、我々の記憶の深層に世界のイメージの原型となって存在し続けると述べている。この論文ではマリー・ホール・エッツの絵本をテキストに採り上げ、エッツの描く世界が孤独な子供の幸福な夢からつくられていることに着目し、バシュラルの説く夢の観点からエッツの絵本の世界を分析する。

## 序

ガストン・バシュラル (Gaston Bachelard 1884-1962) は、晩年の詩学をテーマにした一連の著作の一つ『夢の詩学』( *La poétique de la rêverie*, 1960 )において、それまでの精神分析学的考察を離れ、現象学的手法で夢について論じている。精神分析学では、詩人の生み出すイメージはその詩人の過去に源泉があると定義され、過去や経験を分析することでイメージの意味を導き出していた。しかし詩のイメージは、必ずしも過去や経験の描写ではない。現存する世界との交わりがイメージの着想に大きな影響を及ぼしている。そこで詩のイメージの本源的な効力に力点を置き、それらのオリジナリティのあり方そのものを捉えようとする現象学が必要となるのである。バシュラルは『夢の詩学』の序で次のように述べ、硬直した精神分析学からの解放、現象学的考察への転向を宣言する。

こうして現象学的方法は、イメージの示すほんの微細な変化の発端にあるすべての意識を明るみに出すようにわたしたちに厳命した。他のことを考えながら詩を読むではいけない。ひとつの詩的イメージが改められるや、その数ある特徴のたったひとつでも新しくなるや、たちまちこのイメージは最初のういういしさをあらわすのだから。

このういういしさ、全面的に覚醒させられるこのういういしさがあるため、わたしたちは純粋な気持ちで詩を歓迎するのである。それゆえ活発な想像力にかかわるこの考察において、わたしたちは純粋素朴派として「現象学」にしたがうことにする。<sup>(1)</sup>

まず第1章で、バシュラールは夢(le rêve)と夢想(la rêverie)の区別に言及する。夢を主体が意識を喪失した状態と考えるのに対し、夢想は意識を維持した状態として明確な区別をしている。またフランス語の名詞に見られる性別の観点から、夢le rêve(男性名詞)と夢想la rêverie(女性名詞)を対照させ、言葉の背景に潜む理論化されることのないある種の感覚的な言葉の質感についても触れている。

第2章では、第1章で採り上げた言葉の性差の特性を発展させ、ユングの深層心理学に登場するアニマとアニムスの二元論で夢想の構造を解説してゆく。人は本当に深層で、他のものが介入しない自らの内部で幸福な夢想状態にある時、アニマの作用を受けている。アニマは女性的特性を有し、内密な温かさ、常に変わらぬ優しさを示す。他方、アニムスは能動的で明晰で、論理的な男性的特性を表す。物語に複雑な筋や合理性をもたらすものは、このアニムスの作用である。バシュラールは理想の夢想の形として詩を読む際、初めにアニムスのもとで思考し、次に詩人の夢想を夢想しながらアニマの世界へと下降してゆくことを提唱する。

第3章は、本論の主題となる「幼少時代へ向かう夢想」である。バシュラールはこの章で主張したいテーマを、人間のたましいの中にある幼少時代の核の永遠性を認識することだと明言している。幼少時代を、

不動でしかもつねに生きいきしており、歴史の外側にあり、他人の目から隠れていて、それが物語られるときには歴史を装っているが、しかし輝きだす瞬間、つまり詩的実存の瞬間といっても同じことだが、その瞬間にしか実存とならないものである。<sup>(2)</sup>

と定義し、その輝きだす瞬間、詩的実存の瞬間とは、詩人の想像力が我々に再び幼少時代の夢想を喚起させる時だとしている。幼少時代の孤独な夢想は、記憶と想像が織り成すイマジユとなって、広大な原初の宇宙の中で核となり永遠に行き続ける。我々は幼少時代を夢想することでこのかけがえのない宇宙へと下降してゆき、自身の存在に先行する存在に出会うのである。

第4章は、哲学者の立場からデカルトのコギト・エルゴ・スム(われ思う、ゆえにわれ在り)の問題に立ち返り、夢想のコギトを論じている。我々は世界を夢想することによって、我々が夢想するごとく世界が実存するようになるのである。現実世界を形成している時間や

空間の制約を超越し、夢想と現実の中間領域に自己の存在を見出すことをバシュラルは唱えている。

そして終章となる第5章では、かつてバシュラルが詩的想像力の研究対象とした四大元素や飛翔を再び採り上げ、特に火と水の物質的想像力の深化、世界の拡張に言及している。火は太古と永遠、水は静謐というアーキタイプと密接に結びついている。宇宙においてこれら2つの元素は永遠や静謐の広がりをもって存在し、また我々の記憶の深層にも火の永遠や水の静謐は潜んでいる。火や水を前にする時たましいは夢想へと導かれ、夢想の世界が拡大するにつれ双方の永遠や静謐が共鳴し合い、やがて世界は宇宙と一体となるのである。

以上のように、『夢想の詩学』は夢想に関する現象学的思索である。対象として扱われているのは様々な詩であるが、この論文ではマリー・ホール・エッツ (Marie Hall Ets 1895-1984) の絵本をテキストとし、特に第3章の「幼少時代に向かう夢想」に焦点を当て、エッツの描く絵本の世界を読み解くことで幼少期の孤独な夢想が、作者エッツやその読者の想像力の源泉となっていることを論じてゆく。

# 1

絵本の作者、マリー・ホール・エッツは1895年アメリカのウィスコンシン州に生まれる。自然に恵まれた環境で育ち、野山を駆け巡り、動物と親しむ幼年期を過ごす。また絵画の腕前もこの頃すでに目を見張るものがあって言われている。大学では社会福祉や児童心理学を専攻し、さらに美術学校でも学んでいる。その後児童福祉施設などで働くが、不慮の事故で病に倒れ、社会生活を断念せざるをえなくなる。このことが彼女を創作活動の道へと導くことになる。作家としてのデビューは1935年の『ペニーさん』 (*Mister Penny*, 1935) で、以後1984年に89年の生涯を閉じるまで21点もの絵本を世に送り出す。中でも『もりのなか』 (*In The Forest*, 1944) はエッツにとって特別な意味を持った作品と考えられる。夫であるハロルド・エッツ博士が末期がんに冒されていることを知り、余命を病院での医療にあてるのではなく、自然の豊かな自宅で静かに送ることを二人は選択する。この時期に構想していたものが『もりのなか』である。この論文では主として『もりのなか』『またもりへ』 (*Another Day*, 1953) 『わたしとあそんで』 (*Play With Me*, 1955) を採り上げてゆくが、それぞれの作品について手短かに物語のあらすじを述べておく。

『もりのなか』と『またもりへ』は、一人の男の子が森の中で体験する幸福なファンタジーとなっている。紙の帽子をかぶりらっぱを持って、男の子は森の中へとやってくる。そこでライオン、熊、象、など次々と動物に出会い、それらを連れ森の中を行列をつくって歩いてゆく。次第に行列は長くなり賑やかになると、彼らは遊戯を始める。ロンドン橋落ちたやハンカチ落としに興じ、最後にかくれんぼをする。オニになった男の子が目を開けると動

物たちはいなくなっており、そこへ男の子の父親が迎えにやってくるという物語である。

後編の『またもりへ』も、後日わいわいがやがやと森の中から声が聞こえるので、男の子が中へ入ってゆくと、動物たちが自分の得意なことをして競い合おうと話し合いをしている。男の子も加わり、動物たちは順番に競技を披露してゆく。キリンは首を長く伸ばし、ライオンは大声でほえ、猿は素早く木に登り宙を飛んでみせる。最後に男の子の番となり、男の子は象の真似をして逆立ちをしながら鼻でピーナッツを摘み上げようとするが、おかしくなって笑い出してしまう。男の子が笑う様子を見た動物たちは、目を丸くして驚く。誰も笑うということができないからである。1等賞になった男の子は、花で編んだ冠を頭にのせてもらい、象にまたがって行進をする。動物たちにせがまれ再び無心におなかを抱えて笑っていると、父親が男の子を探す声が聞こえる。動物たちは別れを告げ、気がついたときにはみないなくなっている。そして迎えに来た父親と手をつないで男の子は家路に着くのである。

『わたしとあそんで』も、一人の子供が草原で動物たちと戯れる幸福な物語である。女の子が一人草原へと遊びに出掛け歩いていると、バッタ、蛙、リス、子鹿といった生き物と次々に出会う。女の子は近づき、「わたしとあそんで」と声を掛けるが、草原の住人たちはみな逃げ去ってしまう。遊び相手が見つからず池のほとりまでやってきた女の子は、音をたてずにじっと静かに座っている。すると、どこからともなく先ほどの動物たちが女の子のそばへと集まり始める。そして最後に、子鹿がやってきて女の子の頬をぺろりと舐める。女の子は幸せ一杯で家へと帰ってゆく。

## 2

『もりのなか』『またもりへ』『わたしとあそんで』やさらに『ジルベルトとかぜ』(*Gilberto and the wind*, 1963)『あるあさ、ぼくは』(*Just me*, 1965)など多くのエッツの絵本に見られる共通の特徴の一つは、主人公の子供たちがみな一人遊びをするという設定である。一時、子供たちは社会生活を送っている家族や友人から離れ、自由になり、匿名の男の子、女の子となるのである。エッツは自身が子供の頃、自然の中で一人になり幸福な孤独の中で精神的な自由を感じ、夢想到に遊んだ体験を題材にしていると考えられる。バシュラールは、社会的な人格が形成される以前の子供の夢想到について次のように記している。

わたしたちはたったひとりになり、少し長く夢想到にふけっていると、現在から遠く過去へと運ばれていき、人生の最初の頃の時間をふたたび生き始める。そしてそのとき、幼児のいくつもの顔に出会う。わたしたちの試みの人生、つまりわたしたちのごく幼い頃には、わたしたちは複数なのであった。わたしたちは他人の語る話によってのみ自己との同一性を知るようになったのである。他人の口から語られる自己の歴史

の糸をたどりつつ、年々わたしたちは自己と似てくるのだ。わたしたちは自己の名前という統一体のもとに自己のあらゆる存在を集めるのである。

しかし、夢は語らない。あるいは、すくなくとも夢のなかに非常に深い夢があって、そういう夢がわたしたちを自己のなかのきわめて深いところに運んでいき、わたしたちを自己の歴史から解放する。これらの夢はわたしたちの現在の孤独を人生の最初の孤独へとつれていく。最初の孤独、つまりあの幼少時代の孤独は、あるひとたちのたましいに消しがたい刻印を残している。かれらは生涯を通じて詩的夢に敏感になる、つまり、孤独の価値を知っている夢にたいし敏感になるのである。<sup>(3)</sup>

エッツ自身の幼少時代のモデルとなっているのは、やはり『わたしとあそんで』の女の子であろうが、その他の作品の男の子たちもみなエッツの分身といえる。自己の名前に対しアイデンティティをもつ以前の段階では、子供は性差にとらわれず、さらには人間という枠を跳び越え、動物や雲や星といったものにさえ容易に同化してしまうのではないだろうか。幼少期には他人、特に親から与えられた名前や歴史から解放され、変幻自在に存在を変える能力を持っていることをエッツの絵本は示している。例えば『あるあさぼくは』の男の子は、動物たちに出会うたびに次々それらの動物の真似をして仲良しになろうとするし、『わたしとあそんで』の女の子は、動物たちに一緒に遊ぼうと歩み寄る。また『もりのなか』の男の子は、紙の帽子をかぶりラッパを持って森の中へと入ってゆく。

I had a new horn and a paper hat  
And I went for a walk in the forest.<sup>(4)</sup>

ぼくは、かみの ぼうしを かぶり、あたらしい らっぱを もって、  
もりへ、さんぽに 出かけました。

帽子には個人（個性）を覆うものという意味があり、帽子を変えることは考えを変えることを象徴している。またらっぱは戦闘や宗教的な祭りの際、人々に呼びかけるために使われ、異教的な性格を表すものでもある。これは、男の子が森という異界へと足を踏み入れる儀式のようなものであり、日常の自分とは異なる存在へと変身する意志を示していると推測できる。子供にとって森は魔力をもった神秘的な空間である。陽がさんさんと照っている昼間であっても樹木に覆われ薄暗く、外界と遮断されている感覚にみまわれる。大人たちの目も届かず、子供たちだけの秘密の活動の場となる。子供たちはたいてい恐れと勇気との葛藤の間で森へと向かう。森の中では常にものの気配を感じながら、わずかな物音にも何か得体の知れない存在を空想し、好奇心を最大限に膨らませてゆく。その時子供は、バシュラルのいう社会

と対立しない非社会的な孤独の夢想の状態にある。<sup>(5)</sup>『もりのなか』の男の子も森という日常とは異なる空間で、自由に幸福な夢想の体験をする。エッツの描く森は白と黒のみの木版画のような柔らかい描線で表され、夢幻的な雰囲気のを漂わせる静かで穏やかな、まさに夢想そのものの世界となっている。見返しと裏見返しには物語に登場する動物たちがみな一同に集い、身体が透けた状態で森の中を浮遊するかのよう描かれている。この物語が男の子の夢想による体験だということを暗示しているような絵である。平和で自由な夢想をする子供は、森の中で他のものの存在の気配を感じるによって大人が思いもよらない意外なものとの遭遇を想像し、時間を共有するといった空想を作り出してしまうことは、我々にも容易に理解できよう。たとえそれが象であり熊でありキリンとの遭遇であったとしてもである。バシュラールは夢想と社会との対立関係について以下のように述べている。

幼い頃を夢想しながら、わたしたちはふたたび夢想のすまい、世界を開いてくれた夢想のもとへと戻っていく。わたしたちを孤独の世界に住まわせるのは夢想なのである。そして孤独な子供がイマージュのなかに棲むように、わたしたちが世界に住めば、それだけ楽しく世界に住むことになる。子供の夢想のなかではイマージュはすべてにまさっている。経験はその後にやってくる。経験はあらゆる夢想の飛翔の抑制物となる。子供は大きく見るし、美しく見る。幼少時代へ向う夢想は最初のイマージュの美しさ<sup>(6)</sup>をわたしたちに取戻してくれる。

エッツの描く子供像は、彼らの世界の価値観がまだ客観的な経験や社会性によって構築される以前の幸福な時期におけるものである。しかしバシュラールは、この幼少時代がもろく危うい状況におかれていることに警鐘を鳴らす。

子供が＜ものごころつく年齢＞に達するや、つまり世界を想像する絶対的権利を喪失するやいなや、母親は、すべての教育者と同様に、子供に客観的たれと教えこむのをわが義務とするのである。大人たちが＜客観的＞と信じているような単純な方式での客観的態度をおしつけるのだ。ひとびとは子供に社会性をつめこむ。安定した成人を理想とした大人の人生を子供に準備させる。しかもそれを家庭の歴史の中で教え込む。子供にごく小さいころの思い出の大部分を、子供がいつでも話すことができるようにひとつの歴史をのこさず教える。幼少時代—このやわらかい捏粉！—は他のひとたちの人生をうまく引きつけるようにつぎつぎに試練にかけられるのである。

このようにして子供は家庭との葛藤や、社会との葛藤や、心理的な葛藤の圏内に入っていく。子供は早熟な人間になる。すなわち早熟な人間とは抑圧された幼少時代の状

態にあることである。<sup>(7)</sup>

エッツの絵本はこのやわらかい捏粉である幼少時代の尊さを教えてくれる。『もりのなか』や『またもりへ』に登場する父親に注目してみよう。大人、特に父親というのは、子供の孤独で自由な世界においては、非常に危うい存在となる。父親は深層心理学で男性的特性アニムスのシンボルであり、生命の歴史を客観的に見て事実を語り、他者との関係を促進する役割を持つ。たましいの内面の作用である夢にに必要な安らぎや幸福な平和をもたらすアニマとは対極に位置し、夢の抑制物となりかねない存在なのである。しかし『もりのなか』の父親はこのアニムスを演ずることはなく、男の子の夢と対立しない。男の子の夢を自然に受け入れるのである。

夕方になり森へ男の子を迎えに来た父親は、男の子に話しかける。

“Whom were you talking to?” he said.

“To my animals. They are hiding, you see.”

“But it’s late,” Dad said. “And we must go home. Perhaps they will wait till another day.”<sup>(8)</sup>

「いったい だれと はなしてたんだい？」と、おとうさんが ききました。

「どうぶつたちとだよ。みんな、かくれてるの」

「だけど、もう おそいよ。 うちへ かえらなくっちゃ」と、おとうさんが  
いいました。「きっと、またこんどまで まっててくれるよ」

森の中での幸せな夢を大切に心に抱いたまま、父親にかたぐるまされ、男の子は家へと帰ってゆく。そしてまた男の子は後日、夢の続きを求めて再び森を訪れるのである。

『わたしとあそんで』でも、エッツは主人公の女の子を幸福な孤独の状態におき、夢の世界へといざなう。女の子は草原で出会った動物たちにつぎつぎと声を掛けるが、人を恐れた動物たちは当然のことながら逃げていってしまう。誰とも遊べず一人池のほとりまでやってきた女の子は、座ってじっと池を見つめている。

None of them, none of them, would play with me.

So I picked a milkweed and blew off its seeds.

Then I went to the pond and sat down on a rock

And watched a bug making tails on the water.<sup>(9)</sup>

だあれも だあれも あそんでくれないので、 わたしは

ちちくさを とって、 たねを ぶっと ふきとばしました。  
 それから いけの そばの いしに こしかけて、みずすましが  
 みずに すじを ひくのを みていました。

女の子はただ静かに池の水面を見つめている。みずすましが水面に線を描きながら移動してゆく様子を無心に見ている。この時女の子は次第に夢の世界へと入ってゆき、自己の世界の深層へと意識を下降させてゆく。夢を妨げるものはなく、女の子は深層の宇宙で自由に夢を飛翔させるのである。固有名詞や概念にとらわれることなく、ただものを凝視し、純粹にものの宇宙に触れることの意義をバシュラルは次のように示している。

何と多くの固有名詞が、孤独な無名の子供を傷つけ、いじめ、くじきにくることか。また記憶そのものなかでも、あまりに多くの顔がまいもどってくる。それらの顔は、わたしたちがひとり、たったひとりでいて深い倦怠にひたり、自由に世界を考えたり、沈みゆく太陽や、屋根の煙突からのぼる煙や、ひとりで眺めるときでなければ見のがしてしまうこういう大事な現象を何ものにも邪魔されずに見る、そういう時間の思い出を見つけるのを邪魔するのだ。

屋根からのぼる煙！……それは村と空を結びつける徴である……思い出のなかでは煙はいつも青く、ゆっくりと軽やかにのぼる。どうしてだろう。

子供のわたしたちに、ひとびとはたくさんのものを見せ、そのためわたしたちは見ることの深い感覚を失ってしまう。見る *voir* と見せる *montrer* とは現象学的に言えば激しく対立する行為である。どうして大人たちは自分たちが失った世界をわたしたちに見せることができるだろう。

大人は知っている、知っていると信じている、知っているという……大人は子供に地球が丸くて、太陽のまわりを回っていると証明する。夢みるかわいそうな子供は、それを聞かないわけにはいかないのだ。おまえが教室を出て、丘に、おまえの丘にのぼっていくとき、おまえの夢はほっとして解放感を味わうことだろう。

夢想する子供とは何とすばらしい宇宙的な存在であろうか。<sup>(10)</sup>

夢の催眠状態の中で、女の子は先ほどの辛い経験を癒してゆく。息をこらしてじっと動かずに意識を夢の世界に集中させてゆくと、逃げていってしまった動物たちの気配が感じられ、やがて意識の中で彼らの存在が現実のものとなる。女の子の願望が夢と一体化を始めたのである。つぎつぎと動物たちが彼女の周りに集まり、手に触れることができるまでになる。しかし女の子はまだ彼らに触れることなく意識を集中させ、夢を深化させる。する



とさらに動物たちが近づいてきて、最後に子鹿が女の子の頬をぺろりと舐める。女の子の願望が成就した瞬間である。

『もりのなか』の男の子同様、女の子は実際には共有することのなかった動物たちとの時間を夢想の世界で体験するのである。想像力と記憶の作用を分離する心的能力が未発達な幼少期にあっては、このような夢想の体験が子供の現実の体験として記憶されてゆくのである。

ただ異なることは、彼らを夢想に導いたものが、男の子の場合、神秘性をもち、高揚感を喚起する森であったのに対し、女の子の場合は、平穏と慰めを与える池の水であったという点である。バシュラールは四大元素の水の前における夢想について次のように述べている。

眠れる水の前夢想は、これもまた、たましいの大いなる安息をもたらす。あまりに活発な焰の前夢想よりもやさしく、したがってより確実に、この水の夢想は想像力の支離滅裂な空想を放棄する。それは夢想を単純化する。こういう夢想はいともやすやすと非時間的になる。眺めている対象と思い出をいとも容易に結びつける。〔見ているのは〕光景であろうか、それとも思い出であろうか。静かな水を本当に見ているというべきであろうか、その水を現実に見ているというべきであろうか。語の夢想かによって、眠る水という語は催眠術的なやさしさを含有している。少し夢想してみれば、一切の静謐さは眠れる水である、ということを知るにいたるであろう。だれの記憶の奥にも眠れる水があるのだ。宇宙のなかでも眠れる水は静寂さのひろがり、不動のひろがりである。眠れる水のなかで世界が休息する。眠れる水の前で夢想家は世界の休息と一体化する。

湖、池がここにでてくる。いずれにしても現存在の特権がある。夢想家はすこしずつこの現存のなかに入っていく。この現存のなかでは、夢想家の自我はもはや対立を知らない。かれに対立するものはもはや存在しないのだ。宇宙はに対してという機能をすべて失ってしまっている。池の上に憩う世界のなかではどこにあっても、たましいはわが家にいると同様である。眠れる水はすべてのものを、宇宙とその夢想家を統合してしまうのである。

この融合のさなか、たましいは瞑想している。眠れる水のほとりでこそ、夢想家はもっとも自然にそのコギトを始める、深層の存在がやがてそこに確立されるような、たましいの真正なコギトを開始するのである。<sup>(11)</sup>

池の水は、女の子にとってアニマの役割を果たしていると考えられる。『わたしとあそんで』の前半では、歩み寄ってくる女の子に対して動物たちは逃げ去ってしまう。動物にとって人間は危険な存在であり、身を守るために危険を避けることは自然の摂理である。この前半の

物語は、女の子が現実世界に直面し、社会性、客観性を強いられる過程を描いたものと解釈できる。まさにアニムスを体験しているのである。アニムスの経験は社会的に安定した生活を送る道しるべとなる。だがその反面、子供の心に失望や悲傷や喪失感を残し、幼少時代の幸福で孤独な世界との良好な関係を妨げる可能性を秘めている。

しかしエッツは、アニムスを癒すことを忘れていない。物語の後半で、女の子の心を癒すアニマを用意しているのである。女の子を静かな眠る水の前に置き、水の上をみずすましが動いてゆくという通常見逃してしまいそうな些細な光景を凝視させることにより、穏やかにアニマの催眠状態へと誘ってゆく。動物との再会の場面は、お互いが一言も言葉を交わすことなく、静かな優しさに満ち溢れた美しい描写となっている。

女の子が静かに座っていると、まず初めにバツタが近寄ってくる。女の子は声を掛けずに横目でちらりと見るだけでじっとしている。すると次に蛙も近寄ってくるが、同様に目で確認するだけで声を掛けたり触れようとはしない。そして次々と動物たちが女の子の元へ戻ってくる。いつの間にか女の子の周りを動物が取り囲んでいる。近寄ってくる動物が増えるにつれて、女の子の心はだんだんと喜びで膨らんでゆき、さらに深く深く夢想の世界へと没入してゆく。この時、もはや夢想と現実の境界はあいまいなものとなり、夢想が現実よりもリアリティをもって現実世界にとってかわる。動物との出来事は、確固たる実体験として女の子の記憶の中に存在し続けるのである。女の子は夢想のアニマによって自ら心を癒すのである。最後に幸せ一杯で家へと帰ってゆくという場面で物語は終わるが、おそらく『もりのなか』の父親と同様、女の子の両親もまた女の子の夢想をアニムスで退けることなく受け入れてくれるであろう。

## 結び

エッツの絵本の世界は、わくわくドキドキさせる物語の展開や特別強い感動を与えるメッセージを備えているわけではない。ただ静謐で穏やかな温かみのある絵本である。しかしエッツの絵本を読む時、かつて子供であった大人たちには、何か懐かしい郷愁や幼少時代の淡い幸福感が記憶の深層から甦ってくるのを感じるのではないだろうか。記憶の底に眠っていたアニマが目覚めるためである。我々が再び本当に幼少時代の生を実感するのは、アニムスの記憶によるものではなく、アニマの記憶によるものである。アニマは事実の正確な記録ではなく想像力と記憶の結合したもので、それは非事件的でごく平凡な日常の体験の中から生まれる。この時必要となるのが幸福で孤独な夢想なのである。生をもたらし夢想の時空間について、さらには表現者の夢想との関わりについて、バシュラールは以下のように言及する。

想像力—記憶は、偶発的な事件とは無関係な詩的なものの実存主義により、非事

件的状況をわたしたちに甦らせる。というよりむしろ、わたしたちは詩的本質主義を生きるのである。思い出しながら想像する夢のなかで、わたしたちの過去はふたたび実体を発見するのである。絵画的なものをこえ、人間のたましいと世界の結びつきが強固になる。そのときわたしたちのなかでは歴史の記憶ではなく宇宙の記憶が甦る。何ごともしこらなかつた時間がまい戻ってくる。夢想家の存在が倦怠を完全に支配していた昔の生活の偉大な美しい時間だ。わたしの故郷シャンパーニュの優れた作家がこう書いていた。「……退屈は田舎でもっともすばらしい幸福である。わたしはあの深い、癒しがたい退屈のことをいっているのだ、それは嵩じてくるとわたしたちの夢想を解き放つのだ……」このような時間は復活した想像力のなかに常時存在することは明らかである。この時間は体験の持続とは別の持続のなか、詩的なものの実存主義のなかで味わった、あの深い休息をあたえる非一持続のなかに包含されている。何ごともしこらなかつたあの時間には、世界はかくも美しかった。わたしたちは静謐な世界、夢想の世界のなかにいたのだ。非一生活のこの偉大な時間が、生を支配し、存在の過去を孤独を通過させることによって、みずからの存在とは無関係の偶発事から切り離して深化する。生を支配する生を生き、持続しない持続を生きる、これこそ詩人がわたしたちに取り戻してくれる特権である。<sup>(12)</sup>

エッツは子供たちの毎日繰り返される日常生活の断片を舞台にして、夢想が作り出す子供のイメージの世界を描き出している。そのイメージは実際には起こらなかつたことであっても、現実と融合して記憶となり、潜在意識の中で生き続ける。エッツは子供たちを社会の通過儀礼にさらし、共同社会の一員となることを促すよりも、夢想にふける倦怠の時間に身をゆだねることに重点をおいている。幼少時代の思い出を理想化し、夢想は想像力の記憶術との認識を示していると考えられる。

合理化や効率化が求められ、よりいっそう時間の速度、密度が高くなる現代社会においては、子供たちを取り巻く環境も厳しく、聖域であることを許されない状況に追い込まれつつある。エッツの絵本は、幼少時代の無為な時間こそが我々の生の原点を形成する場であること、そして子供の自由な夢想を妨げないことが最も子供の心の幸福に貢献することを教えてくれる。無駄を許そうとしない不寛容な文明社会に一石を投じ、物事の価値観を考え直す必要性を訴えていると、今日の我々には理解できるのである。

註

- (1) Bachelard, Gaston. (1960) *La poétique de la rêverie* : Presses Universitaires de France, pp.3-4. (日本語訳は及川馨訳 (1974) 『夢の詩学』 (思潮社) を使用した。以下同じ。)
- (2) Bachelard, G. (1960) p.85.
- (3) Bachelard, G. (1960) p.84.
- (4) Ets, M.H. (1944) *In the forest* : The Viking Press, p.p.3-4. (日本語訳は一般に親しまれていることから、まさきるりこ訳 (1963) 『もりのなか』 (福音館書店) を使用した。以下同じ。)
- (5) Bachelard, G. (1960) p.92.
- (6) Bachelard, G. (1960) p.87.
- (7) Bachelard, G. (1960) pp.91-92.
- (8) Ets, M.H. (1944) p.37.
- (9) Ets, M.H. (1955) *Play with me* : The Viking Press, pp.18-19. (日本語訳は一般に親しまれていることから、よだじゅんいち訳 (1968) 『わたしとあそんで』 (福音館書店) を使用した。)
- (10) Bachelard, G. (1960) pp.109-110.
- (11) Bachelard, G. (1960) p.169.
- (12) Bachelard, G. (1960) pp.102-103.

参考文献

- 金森修 (1996) 『現代思想の冒険者たち 05 バシュラール 科学と詩』 講談社。  
及川馨 (1989) 『バシュラールの詩学』 法政大学出版局。  
松岡達也 (1984) 『バシュラールの世界—文学と哲学のあいだ』 名古屋大学出版会。  
アト・ド・フリース著・山下主一郎主幹訳 (1984) 『イメージ シンボル事典』 大修館書店。